

赦し合う心・愛を創り出す力

菅 根 信 彦

奨励者紹介〔すがね・のぶひこ〕

日本キリスト教団神戸教会牧師

同志社大学神学研究科嘱託講師

頌栄保育学院理事長

だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです。怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでいてはいけません。悪魔にすきを与えてはなりません。盗みを働いていた者は、今からは盗んではいけません。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい。悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい。神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです。無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしりなどすべてを、一切の悪意と一緒に捨てなさい。互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい。あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。

(エフェソの信徒への手紙 4章25節—5章2節)

私たちの心の世界

私たちの心の世界とは実に不思議な世界です。いつも一定で安定しているわけではなく、心配や不安なことが起これば、心は縮み上がります。傷つけられれば、不機嫌になります。そして、怒りっぽくなり、誰かに当たり散らす場合があります。時にその怒りが暴力に発展する時もあります。また、良いことがあれば、機嫌が良くなり、体も元気になります。一日一日と心は変化し、その心の世界の様子によって人間の体も様子も変わります。

私の勤める神戸教会は二つの付属幼稚園をもっています。1学年1クラスの小さな幼稚園ですが、私は牧師であると同時に、その二つの幼稚園の園長をしています。幼稚園に通う園児たちの小さな心もまた毎日違います。心がいつも安定している子どもなど1人もいるわけではありません。いや、時間によって、子どもたちの心は変化に富んでいます。体調が悪いのか、機嫌が悪いのか、あるいは親に叱られたのか、朝に「泣きながら」登園してくる子どもたちがいます。しかし、園舎に入って先生やお友だちに声をかけられれば、5分もすれば、笑い声が戻ってきます。幼稚園で「おもちゃの取り合い」、「ゲームの順番の争い」で喧嘩になり、互いにいがみ合う子どもたちも、教師の仲直りの交渉が整えば、「赦し合い」、直ぐにでも一緒に遊び始めます。「ごめんね」と喧嘩を仕掛けた子どもが謝れば、その瞬間、やられた子どもも「いい

よ」と言って赦してあげます。そして、喧嘩がなかったように仲良く遊びます。その意味では、子どもの「関係修復力」には凄いものがあります。「仲直りする力」、「和解や赦し合う力」は、大人の比ではありません。「和解や赦し合う力」について言えば、大人の心の方が実は複雑で、むしろ、人生の「経験」と「知恵」を積み重ねるほど、自分を守り、自分の正しさを主張し、自分が悪かったと分かっているにもかかわらず、どうしても素直になれない、正直になれなくなります。

正直になれない大人

皆さんもどうでしょうか。それは、学生である皆さんだけではなく、ここにいる教職員の方も例外ではないでしょう。そして、牧師をやっている私自身も、自分の気分に任せて人の心を傷つけてしまったり、相手に配慮のない言葉をかけてしまったり、全く無意識に人の心を傷つけてしまうことがあります。時に「しまった」と、自分が気分を害する言葉を吐いてしまったことに気づいても、正直なかなか謝れません。また、逆に、自分に対して謝る人をなかなか素直に赦すことができないのです。簡単に言えば、「ごめんなさい」そして「もういいよ」がどうしても言えないのが大人なのかもしれません。それだけ心は深く広く、そして、複雑で闇の部分をもつものです。

心はつつむもの

かつて、平易な作風で知られ、「台所詩人」と言われた高田敏子さんという詩人がいました。彼女の作品に「水のころも」（『高田敏子詩集』花神社 1997年）という短い詩があります。とても素晴らしい詩ですので一部を紹介します。

「水は つかめません。水は つつむのです。

二つの手の中に そおっと 大切に /水のころも 人のころも」

このような詩です。そうです。人の心はつかめるものではありません。つかもうとしてもこぼれていくほど、心は繊細なのです。人の心は本当の意味では理解できないのかもしれません。むしろ、人の心はつつむしかないのです。二つの手の中にそっと大切に抱え込むようにつかむのです。そうすることによってどうやら、人の心は、そっと見えてくるようです。

人間の憎しみの感情

さて、そのそっと見えてくる人間の心の中には、先ほども申しましたように、さまざまな感情が渦巻いています。「人間は感情の生き物である」と言われる所以がそこにあります。それは、感情が人間行動の最大の動機となるからです。

「感情」とは物事や対人関係に対して抱く気持ちのことですが、人間にはどのような種類の感情があるのかについては、古来よりさまざまに議論されてきました。日本でも「喜怒哀楽」という言葉がよく用いられます。「喜びと怒り」、「悲しみと楽しみ」を表現します。現代では、一般的には、人間の感情を6種類に分けて考えられています。「喜び」「怒り」「哀しみ」「楽しみ」「愛(いと)しみ」「憎しみ」の6種類を「感情の種類」として上げています。そして、これら主要な人間の感情は4歳頃までに形成されていくとも言われています。「幼児教育の大切さ」を示されます。「感性教育の大切さ」を教えられます。感情は気分的なも

のから、「情熱」や「情操」など広範囲の心の領域をもち、そして、「感情」と「思考」と「認知」は、たとえその人が意識に上らせなくても密接に関係しあっていることも近年の脳科学でも指摘されていることです。

痛ましい事件と心の闇

そして、現代社会の中で、さまざまな感情が交差する中で、私たちは、同時に人間の「感情」が、特に激しい感情、憎しみや怒りが、昨今、短絡的な行動へと導いていく傾向を危惧します。昨日、川崎市登戸でカリタス学園の園バスを待つ児童が刃物で切り付けられ、小学校6年生の児童と保護者の方が殺傷される痛ましい事件が起きました。また、幼児虐待は後を絶ちません。千葉県野田市で、小学校4年生の女子児童が虐待の末、命を落とす事件があったことは記憶に新しいことです。昨年3月には、東京都目黒区のアパートで当時5歳だった船戸結愛ちゃんが死亡した虐待事件がありました。幼稚園を運営している私たちもショックを受けました。両親の長期間にわたる虐待により、結愛ちゃんが低栄養状態などで起きた肺炎による敗血症で死亡したものでした。5歳児はだいたい20kgほどの体重ですが、結愛ちゃんは12kgしかなかったといいます。「もうおねがいゆるして ゆるしてください おねがいます」という結愛ちゃんのひらがなの手紙は多くの人の涙を誘いました。

5歳の子どもですよ。親しか頼れない子どもが、その親の愛憎で命を落とすというような事件は絶えることはありません。人間の憎しみの深さ、人間の心の闇の深さを見ます。

「憎しみで憎しみを

消すことはできません」

その暗闇が漂うような現代社会の中で、私はいつも一つの言葉を思い出します。それは、広島平和記念資料館の第7代館長であり、ご自身が被爆者であった高橋昭博さんの言葉です。高橋さん（2011年11月2日に逝去）は広島市の職員退職後も、2010年に広島で開催された「ノーベル平和賞受賞者世界サミット」などに協力して、核廃絶や原爆の語り部として平和のために働かれた方です。『ヒロシマのちの伝言―被爆者高橋昭博の50年』など多くの著書も出されています。

その高橋さんがこのようなことを語っているのです。「原爆には憎しみを持っていますが、憎しみで憎しみを消すことはできません。他の人に心を開くことを決して忘れてはならない」（2010年11月12日付夕刊 朝日新聞）。「憎しみで憎しみを消すことはできない」。その言葉を聞いた時に、被爆という痛みを負った長い人生の経験の中から、まさに命を絞り出すようなメッセージであったと思いました。それは同時に「憎しみ」のもつ破壊性や、「憎しみ」の連鎖性、増幅性というものを改めて強く抱きました。そして、人間は「怒り」、「憎しみ」の連鎖を断ち切ることをおぼつかさを感じました。しかし、高橋さんたちの思いが、2016年5月27日の当時のアメリカ大統領であったオバマさんの広島来訪を促し、核兵器削減・廃絶への演説を導いたのだと思います。

キリスト者の生き方

聖書も、この人間の抱く破壊的な感情の一つである「憎しみ」「敵愾心」に対して、人間のあるべき姿を提示し追求しています。特に、キリスト者の生き方、心構えを含めて、キリスト者の倫理を表示します。その

一つが、今日の聖書箇所であるエフェソの信徒への手紙4章25節以降の箇所です。その4章26節には「日が暮れるまで怒ったままでいてはいけません」、そして、30節には「聖霊を悲しませてはいけません」、さらに、32節には「互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい」との言葉が出てきます。この32節の言葉を覚えておいてください。怒りを覚えた時、憎しみの感情を抱いた時、この32節の言葉を思い出してください。

特に、25節の冒頭には、「それぞれ隣人に対して真実を語りなさい」との勧めがなされています。私たちは、イエスの愛と執り成しによって罪を赦されたものですから、同時に神の「真実」を求めて生きることが促されていることが分かります。イエスがまず、私たちを赦し、憎しみを十字架に付けて死なれた。その愛をしっかりと受けることによって、真実を語るができると言っているのです。イエスは人間の怒りと憎しみに対して、「敵を愛し、迫害するもののために祈れ」と命じています。そして、事実、イエスは十字架の上で、自分を十字架にかける人々に対して、ルカによる福音書は「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのかわからないのです」（23章34節）と語り、和解と赦しを与えるイエスの姿を描いています。そのようなイエスの愛と赦しによって、人間のあるべき姿を示しているのです。それは、私たちの心、憎しみや怒りを含んだ心情や存在を分析して裁くのではなく、赦しと愛をもって包んでくれた。そのイエスの愛のせまりが、今日のエフェソの信徒への手紙4章を書いているのです。「神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい」と語るのです。

愛は狭さを破ること

さらに、その赦しから1歩進んで、5章2節ではキリストが私たちのために命を献げたように、愛によって歩みなさいと聖書は語ります。赦し合う心から、さらに、愛を作り出す力をもって歩むことを促します。

カトリック信者で、日本の評論家に犬養道子さんという方がいました。2年前に亡くなりましたが、40年以上にわたって世界の難民支援活動に積極的にかかわった方です。90歳を越えられてからもカトリックのイエズス会の難民支援組織JRSと連携しながら「犬養道子基金」を造り難民支援活動を展開していました。国連で働いた緒方貞子さんとも親戚関係です。その犬養さんが、生前こんな言葉を残しています。

「愛とはまず、狭さを破ることである。視界と心の狭さを果敢に破って、広く『出ること』である」（犬養道子『人間の大地』中央公論社 1983年）。このような心に残る言葉を残しています。彼女は、異質なものと出会い、人と人の関係を再構築する働きこそが、キリスト・イエスの福音に生きることであると語っています。愛は狭さを破る。心の狭さを破ること。赦し合う心も、自分の自我を砕いていくこと。その狭さを破ることと同じです。イエスが当時のさまざまな偏見や差別を破って、私たちを赦し愛したように、どうか、皆さんも自分の心の狭さ、視野の狭さを破って、果敢に広く出ていく。赦し合う心、さらに、愛を作り出す力を養って、賜物を用いてこの社会の中で、仕え生きてほしいと思います。

2019年5月29日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録